

大学図書館問題研究会 京都

京都市左京区北白川迫分町 京都大学数理解析研究所図書室

(提筆宛付)

TEL 075-753-7223

医学図書館員の現在

篠原 俊夫

金沢大学医学図書館に出張する機会があって、晩秋の金沢を訪れた。医学図書館の建物は、京大医学図書館の建物と似たりよったりの古びた、ありていに言えば、貧弱なものであった。図書館の組織も一係で、ベテランの係長が孤軍奮闘しておられるという印象を受けた。何も取り立てて見せるものがないということで狭い館内を15分ほどかけて案内されたあとは互いの図書館員としての履歴を紹介しあうようなことになってしまった。仮にベテラン係長の名前をS氏としておくが、S氏の話の何うほどに氏の医学図書館の仕事にかける情熱が並々ならぬものを感じられて、さまざまに思うことがあった。ひとつには、いつまでたっても意識の片隅にかりそめの宿りを強いられた人文系図書館員という思いがぬけない自分との落差を思ったからに違いない。S氏の図書館員としてのキャリアは、私の推測では30年余、その間数年間の附属図書館勤務を除いてひたすら医学図書館員として骨苦精励してこられたらしい。S氏には医学図書館の現場を離れなければならなかった数年間が苦痛でならなかったらしい。氏の言葉で言うと医学図書館の現場を離れた自分はただの図書館員に過ぎないということになる。主題に通じていない図書館員は、図書館員ではないというのが、S氏の図書館員論である。S氏はいまでも新着の外国雑誌に目を通して、教官の研究領域に関連する論文をみつけては、その情報をそれぞれの教官の耳に入れたり、論文のコピーを時には転任先の大学にまで送ってあげたりしているのである。ここまでやれるのは（やっているのは）日本で私ひとりだと思いますがとまで、私の聞き間違いでなければおっしゃった。日本でひとりという氏の密かな自負が妥当なものか否かは知らない。けれども生命を救済する医学こそ至上の価値を有する学問であり、それを手だけできる医学図書館こそが図書館員の最高峰であるというS氏の信念はゆるぎないものを感じられた。学問の価値は必ずしも生命を救済したり、経済的に実生活を救済したりする実学としての機能に限られているわけではないと言え言えるが、それは医学図書館員としての献身の姿勢が言わせる言葉と思えば納得できる。ただ、献身的な仕事をすれば学内的に認められ、むくわれるというのは別の問題らしく、ここ金沢大学においても教官が予算獲得や人員確保のために動いてくれることは殆どないという。学内的に発言力があり、図書館活動の意義を認める教官が動いて、尽力してくれなければ弱い立場にある図書

館の改善がのぞめるわけがないというS氏の言葉に激しい憤りと同時に諦めに近いものを感じた。自分が貴重な論文を見つけてあげた労苦にに対してその場限りの感謝の言葉があるきりで、あとはむしろ図書館員風情に論文の存在を示唆されたのは公表をはばかることくらいにしか考えていない教官の意識をしきりに嗅いておられた。無論、S氏は個人的な上昇指向など微塵も感じさせない実直な人柄の方である。S氏の怒りは納得できる仕事をしたのに、それを許さない日本の特殊な学問的、人間的風土に向けられたものと言ってもいい。

昨年、信州大学附属図書館医学分館にお邪魔した時、専門員のM氏にお話をうかがった時も同じようなことをおっしゃっていたことを思い出していた。M氏も医学図書館一筋といった雰囲気を感じさせる人であった。話の端々に仕事に対する様々な思い入れや自負、事務局の無理解な人事に対する鬱積した不満が感じられた。

私のような新米医学図書館員は、地方の医学図書館にあって何十年というキャリアの人の中に個人的な知己を得ることは少ない。医学図書館協会の集まりはあっても、その場限りの情報交換や交歓にとどまるわけだから、立ち入って、あるべき医学図書館や図書館員論を交わすこともない。だから、たまたま機会があって医学図書館界の大ベテランに逢い建前ぬきの率直な意見や持論をうかがう時、ある種の感慨を覚えずにはいられない。

感慨などという曖昧な言葉を排して、その根拠を私なりに明らかにしてみようと思う。まず第一に地方のいずれかと言えば、中ないし小規模の医学図書館にそれらの人々は活躍の場を見出している。というより、短期間に異動を繰り返し、瞬く間に風のように過ぎてゆく、大都市圏の大規模大学の医学図書館には、もはやえぬきの医学図書館員など存在しないのである。これは滋賀医科大学の渡辺幸子氏が詳細な調査に基づいて、分析、立証していることなので、あらためて繰り返すまでもないことである。(注)

その地方の大学図書館にも部課長制が敷かれ、規模は小さいなりに短期間に異動を繰り返す大規模大学方式が急速に浸透しつつある。そのような環境下で医学図書館員だけが自己の専門性を盾に異動を拒否するには限度があり、泣く々々も不慣れな他部局の図書館や附属図書館に移ってゆくのである。大げさに言えば、苦節数年、臥薪嘗胆の果てに再び医学図書館員として復帰できた幸運なケースもあるというくらいのものである。本来、図書館員はいずれかと言えば、長期間おなじ場所に留まり、その業務に習熟することで主題に通じた専門職として自己の仕事に確信をもつことができた。極端な例では、その大学に就職してから、一つの部局の図書室の片隅の机を動くことなく、30数年座り続けて退職するということもあり得たのである。良くも悪くも、その図書室の主であり、仕事の隅々に精通した紛れもない大ベテランであった。勿論、大ベテランがともすれば変革を嫌って、結果的に業務の停滞と後進性をもたらす場合もあったに違いない。しかし、ともあれ仕事に対する専心と精進、ほとんど自己犠牲とさえ思える献身的態度、時として過剰とも見える誇り、これらの今となっては、一種懐かしい、古風な気質の図書館員がまさに最後の光を放ちながら流れ星のように過ぎて行こうとしている。最後の医学図書館員気質を持った人がここにも一人いる。私はS氏と話ながら、何時か自分だけの感慨に耽っていた。私は別の場所でも何度かこのような思いにかられたことがあった。そして共通項は大概、地方の中小規模の大学医学図書館員、強いて昇進を望まず、日々の仕事のなかに満足を見出そうとする気持ちが強い。

他人事ではなく私も世代的に言えば、過渡期の図書館員であり、過ぎ行く者の一人に違いない。ただ残念ながら、私は遅ばせに、しかも余儀なく医学図書館員としての短い一時期を送り、また消えてゆく存在に過ぎない。私は言わば、部外者のまなざしで、しかし敬意をもって、これら懐かしく床しい図書館員たちを見守る他ない。これらの人々が、それぞれの占めている場所を去った後には何が残るのだろうか。明日は明日の風が吹く。何をもってしても替え難いものなどないという考えもあろう。事実、その後も何事もなかったかのように、新しい設備と新しい顔と意識をもった図書館員によって医学図書館は存続するだろう。しかし、何かが違うという私の思いは消えない。今、過ぎて行こうとしている人々の声高でなく、けれど確かな説得力をもつ主張に謙虚に耳を傾けなければという思いに頻りにかられていた。

話をもとにもどすことになるが、S氏は医学図書館員になって間もない頃世界の優れた図書館活動を知りたいという動機から、有金をはたいて単身オランダで開催された医学図書館会議に出席し、帰途に米国をまわってNLMまで見学してこられたというのである。当時は外貨の制約もあり、日本人の海外旅行が珍しかった頃のことである。

医学図書館の会議に出席するためという名目で出発した旅は結果的に50数日におよぶヨーロッパ、アメリカをめぐる世界萬遊旅行となり、帰国後事務長に呼ばれてたっぷり説教されたという話も面白くもあり、驚きでもあった。その当時であればこそ許されたよき時代のエピソードというべきなのであろう。しばし、談論風発の後、S氏が金沢工業大学のライブラリーセンターを見学してゆくよう勧めてくださった。以前から機会があれば見学したいと思っていた図書館だったので、自分の車で案内して下さるといふ氏のご厚意に甘えることにした。S氏は車を運転しながらも自館の貧弱さをなげき、金沢工業大学の図書館の素晴らしさを強調されていた。私も最新の図書館施設の素晴らしさや専門の教員が交替でレファレンスに携わるサブジェクト・ライブラリアン制度のことは聞きかじっていたので、それを実際に自分の目で確かめてみたいと思っていたのである。

結果的には、時間が限られていたせいもあり、サブジェクト・ライブラリアンについての詳しい説明を受けることはできなかった。機器や設備についてはAV施設などに面白い趣向がこらされているが、さほど驚くほどのものではない。やはり金沢工業大学の図書館としての評価はサブジェクト・ライブラリアン制度をどう考えるかによって異なってくるだろう。いまでも見学希望者は引きも切らず、私が見学する直前にも200人の団体が訪れていたということである。大学案内によれば、工学系図書館として世界最大級の施設であるという。又、大学“附属”図書館ではなく、あえて「金沢工業大学ライブラリーセンター(KIT-LC)」と名付けたのは、明確な理由があり、それは例えば従来の大学図書館にない4つの機能(教育センター、研究センター、卒業生のための学術情報センター、地域社会のための情報センター)を持っていることだといふ。そして大学案内には書かれていないが、もうひとつの理由は大学内の個別学部や研究者からの直接的な干渉や影響力を排除して、独立した地歩を確保するのが目的だったようである。これがライブラリー・センターという日本ではなじみのない呼称を採用した理由だといふ。

この大学では、学生に対する利用者教育を重視して、「図書情報技術」を全学科の学生が1年次に必修することになっているようである。これらのシステムや制度は、アメリカの大学では特に目新しいものではないが、日本の大学では殆ど例がない。来年はライブラ

リーセンターが発足して10周年にあたるようである。10年間の図書館活動の総括と自己評価を世に問われてはいかがなものかと僭越ながら感じた次第である。正直に言えば私が一番知りたく思っているのである。

慌ただしく金沢工業大学の見学を終え私は、言わば最先端の大学図書館とS氏が謙遜して言われるところの古いばかりで取り柄のない図書館とを対比的に見たことになる。結論から言えば、私にとって最大の関心事は人間であり、その人間の創り出す図書館サービスの行方である。時期はずれに暖かく、穏やかな古都の光のなかで私は時にS氏の隣におられることも忘れて様々な思いにかられていた。

(注) 渡辺幸子 官俸制とプロフェッション — 国立大学に医学図書館員は可能か。
第15回医学図書館員セミナー論文集 1988 : 24-35.

近畿五支部合同新春例会

京都「修学院」にて開催 — 講演テーマは「三行半」

面白いエピソードも聞けるよ

日時	1992年1月18日(土)午後3時～
場所	『関西セミナーハウス』 TEL 075-711-2115
講演	三行半について
講師	井ヶ田良治氏(同志社大学教授)
参加費	500円
懇親会	『無法松』にて(約6千円) TEL 075-722-8590
申込	同志社人文研 竹本まで TEL 075-211-3940
〆切り	1月10日(金)午後4時 期限厳守

講演テーマ「三行半」は、普通「去り状」とか「離縁状」などと思われていますが、実は「再婚権の保証書」という機能が重要でした。明治初期の文書を一緒に読みながら、三行半の歴史・社会的機能などをエピソードをまじえてお話頂く予定です。そして三行半の考証を通じて江戸時代における女性の権利の実態についても考えます。

講師の井ヶ田教授はメリハリがあって分かり易い講演をされると定評のある方です。会場の近くには修学院離宮、詩仙堂、曼殊院など名所旧跡があります。早目に来て散策してはいかがでしょうか。きっと楽しい新春合同例会になると思います。